地域性の形成論理

1．研究組織

研究代表者：坪内　良博（京都大学東南アジア研究センター・教授）
研究分担者：石井　　溥（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）
加納　啓良（東京大学東洋文化研究所・教授）
北原　　淳（神戸大学文学部・教授）
桜井由躬雄（東京大学文学部・教授）
山下　晋司（東京大学教養学部・教授）
田中　耕司（京都大学東南アジア研究センター・助教授）

2．研究のねらい・目的

本研究班では、地域研究の対象である「地域」の社会および文化の独自性の形成にかかわる普遍論理と個別論理の交錯のメカニズムを、東南アジアおよびそれを挟む中国・インドの状況を手がかりとして解明することを研究の大きな枠組みとしている。そのために、平成５年度においては、東南アジアの社会・文化の特徴を表すさまざまなキーワードを東南アジア各地の具体的事例に即して、また東南アジア以外の地域との比較において掘り下げていくこと、および「中心と周辺」「国家とエスニシティ」あるいは「都市と農村」というような二項対立的な概念枠組みのなかで東南アジアの地域性の形成と変容のダイナミズムをあつかうこと、この二つを研究班の目的として設定した。平成６年度には、以上の二つの目的を念頭に、各メンバーの個別課題に加えて、班全体の共通テーマとして、「フロンティア」ならびに「周辺と境界」という課題をあつかうことにした。そして、平成７年度には、すでに古典的な「複合社会」という東南アジアの捉え方に関連した「複合性」を共通課題として、共同研究を実施した。

以上のような過去３年間の経過をうけて、本年度は東南アジアの「歴史過程と地域形成」を共通の課題として、地域性を形成する要因としての歴史性に注目しつつ各分担者の研究視角から東南アジアの地域性の形成に迫ることにした。また、最終年度にあたるので、これまでの研究成果をまとめるための準備作業に着手することも今年度の大きな目的とした。

3．平成８年度の研究経過

目的の一つとして掲げた「歴史過程と地域形成」の共通課題に対して、資源論の立場か

ら、あるいは民族・文化関係論や国家・民族関係論の立場から、そして歴史地域研究の立場から等々、各分担者の研究視点に配慮しつつ、計画研究班主体の以下の研究会を開催するとともに、関連する公募研究班との合同研究会をもった。

(1)研究打合せ会(5月31日、京大会館)

各メンバーの平成7年度までの研究経過をふまえて今年度の役割分担課題を打合せるとともに、最終成果を視野にいれた成果とりまとめ計画の大枠について検討した。その結果、東南アジアの固有性と地域性の形成に焦点をあてた出版を目指し、当面、以下のような構成を念頭に各メンバーが執筆を構想する方向で意見がまとまった。

第1部:土地・資源・社会からみた東南アジアの固有性(人口－資源関係とそこに成立した社会、東アジアと東南アジアの比較の視点を加味する)

第2部:東南アジアの複合性(東南アジアの文化のモザイク状況に焦点をしぼる、南アジアとの比較の視点をくわえる)

第3部:形成される東南アジア── エスニシティと「歴史圏」──

また、上記のとりまとめ構想にしたがって平成8年度の研究実施計画を打合わせ、下記のとおり研究会を開催することにした。

(2)第1回研究会(9月27日、京大会館):A02公募研究班(宮嶋班)との合同研究会

上記とりまとめ構想の第1部に関連して「土地・資源・社会── 東南アジアと東アジアの比較」というテーマで研究発表が行われた。発表者・テーマは以下のとおりである。

宮嶋博史「マウル(村)とその住民」

田中耕司「東南アジア海域世界の『農民』とフロンティア社会」

加納啓良「ジャワ型稠密社会の形成── 移動・拡散から固着・定着へ」

宮嶋は、17世紀の地誌『晋陽誌』に記載される村落と現在の村落とを参照しながら、地名の継承関係から朝鮮の村落社会(マウル)の形成と展開を紹介した。17世紀までその存在が確認しうる村落が約半分ほどあり、これらの村落は「里坊体制」のもとでの村落間の支配関係のなかにあったこと、そして、この体制が17世紀以降に緩やかに崩壊し始め、村落数の増加と村落間の階層関係の崩壊が20世紀まで継続したことを明らかにした。そして、「支配」から「自治」へという村落社会の変化が遅くとも18世紀には始まり、このことが朝鮮独自の農村社会をかたちづくったことを指摘した。

田中は、昨年度の研究発表「開拓前線における適応戦略── 民族的差異と『インドネシア式』複合社会」を敷衍するかたちで、資源－人間関係の視点から、インドネシアのスラ

ウェシやカリマンタンの開拓空間そしてカリマンタンの稀少自然資源採集者などの調査事例にもとづいて、フロンティア社会の形成と持続、言い換えれば、開拓社会特有のフロンティア性の永続性について議論を展開した。東南アジア島嶼部の人口／資源比の低さ、すなわち開拓余地の豊富さに東南アジアの地域性の一つとしてのフロンティア性を帰することができるのか、あるいは開拓余地がなくなればフロンティア性が失われるのか、この点を巡っての議論である。東南アジア島嶼部においては自然（資源）の「構想的利用」の方向ではなくむしろその「投機的利用」が優勢で、このことによって域外からの需要が続く限り、フロンティア性が固有の地域性として継続するのではないかという見方を提唱した。

一方、加納は、東南アジアでもっとも人口稠密な地域であるジャワを対象に、ジャワ的社会の形成について「農民」や「農村」を分析視角として議論を展開し、ジャワ社会が現在のような稠密社会になったのは比較的新しい現象であることを明らかにした。そのうえで、いったん固着・凝集したジャワの村落社会がインドネシアにおける新たなジャワ的空間の拡大というフロンティアを形成しており、この動きが「固定・凝縮」以前の「移動・拡散」というジャワ古層の性格と密接に関連することを「開発の時代」と関連させつつ論じた。

（３）第２回研究会（12月25日、東京外国語大学ＡＡ研）

上記の成果とりまとめ構想の第２部「東南アジアの複合性」に対応する話題として、以下の研究発表が研究分担者によって行われた。

北原　淳「ナショナリズムとエスニシティの変容？ ── 『複合社会』の経済変動と社会変動」

石井　溥「南アジアから見た東南アジアの複合性」

北原は、平成７年度の報告「国家・都市・農村関係の認識 ── タイ近現代の場合」を承けつつ、視点をさらに現代へと移し、経済発展下の「中間層」の台頭あるいは「華僑文化論」の出現などをとりあげて、資本主義および民主化などの普遍原理の浸透のなかで揺れ動くタイの都市居住新世代が形成する新しい社会の性格について議論を行った。そして、新世代の台頭がエスニシティの再定式化やネーションの再定式化へ向かうのか、あるいはそれらの消滅に向かうのか、これらの両方向についての最近の研究を紹介し、東南アジアの複合性に迫る新たな視点を模索した。

石井もまた、昨年度の発表「複合性・全体性と階層性／平等性 ── 南アジアの視点から」を承けて、東南アジアの「複合社会」と南アジアの「複合社会」の比較論を展開した。英

領インドとジャワにおけるカースト、植民地統治下の社会関係、王権のあり方などを議論したうえで、「インド－ネパール－東南アジア」という、ネパールを両地域の間に介在させた比較軸が東南アジアの複合性をより明確化するツールとなるのではないかという視点を提供した。

(４)第３回研究会（３月１日、京大会館）：A02公募研究班（林班）との合同研究会

成果とりまとめ構想の第３部「形成される東南アジア ── エスニシティと『歴史圏』 ── 」に関連する以下の発表が分担者によって行われた。

桜井由躬雄「東南アジアの歴史圏の見方について ── ベトナム紅河デルタを中心に」

山下晋司「東南アジアにおける民族／文化複合性と民族／文化間関係」

桜井は、昨年の発表「亜地域のなかの中心と辺境」で、一定の時期に共通した歴史的体験を共有した特定の範域を「歴史圏」として定義し、「地域」はその歴史圏の重層のうえに成立するとした。それを承けて、その「地域」を対象にする「歴史地域学」の立場からの地域理解へのアプローチと世界単位論やネットワーク論によって試みられている地域理解へのアプローチとを対比した。具体的には、紅河デルタとメコン・デルタおよび東北タイの調査事例をあげて、18世紀におけるグローバルな変化に対応した各地域独特の「歴史圏」の形成過程を紹介した。

山下は、昨年度の民族／文化をめぐるグローカライゼーション（glocalization）の議論を敷衍するかたちで、複数の民族集団、複数の文化の併存・交渉・混交のなかから新しいアイデンティティをもった民族／文化が生み出される過程をクロンチョン音楽の成立と展開を追いながら論じた。

４．研究の成果とフロンティア

過去３年間と同様に、今年度も共通課題に引き寄せながら各分担者の研究関心を発表するという研究の進め方をとったので、概ね順調に所期の研究活動を進めることができた。以下に、研究組織のメンバーそれぞれがまとめた「研究の成果とフロンティア」を引用して、平成８年度の成果を概括することにしたい。

坪内良博：　昨年度に続けて本年度も共通のテーマを設定したが、成果のとりまとめを念頭においたためか、研究会自体はこれまでの４年間の共通課題にも関連した発表によって開催されることになった。このことは、研究班全体の研究とりまとめという方向付けに有効であったが、一方では「歴史過程」を十分に議論できなかったうらみも残る結果とな

った。4年の研究期間のなかで地域性の形成に関わる様々な要素・要因があげられたが、それらは「流れるもの」「形成されるもの」「関係づけるもの」「変わらないもの」というカテゴリーに分類できるようである。一方、こうした地域の形成要因のカテゴライゼーションに資源－人口関係を介在させることによって地域の性格がより一層明確にできるのではないかという見通しを得ることができた。地域の変動・変容の側面に対して地域の不変の構造を明らかにする地域研究の目指すところがおぼろげながら見通せるようになったというのが、4年が終わろうとする現在の心境である。

石井　溥：東南アジアと南アジアを比較しつつ、諸文明・諸文化の重層性、階層性、複合性とその相互間系、文化変化の様相の分析・考察を深めるため、ネパールとインドにまたがる、ヒンドゥー文化の中心ミティラー、ヒマラヤ南麓の小文明圏カトマンズ盆地および周辺のネパール山地部社会の臨地調査を行い、あわせて、東南アジア等の他地域との比較研究も行った。それにより、調査対象社会の変化の態様が明らかになり、また、比較の観点から、アジアの王権や複合社会に関しての従来の説には再考の余地があることが判明した。

加納啓良：(1) ジャワにおける［稠密社会］形成の歴史的起源と過程を、19世紀初めの地税制度導入期の農村について検討するため、東部ジャワのバンギル県の地税賦課「詳細査定簿」(detailed settlement report) に記載されたデータをパソコン・データベースに入力する作業を昨年度に引き続き進め、個々の耕作者別のデータの入力作業を行った。(2) これに関連して、ジャワの上層土地所有農の存在形態とその特質を、戦前日本との比較を念頭において考察する作業を行った。また、インドネシアにおける「農民」概念とその普及過程について、簡単な語源的考察を試みた。(3) 近現代の東南アジア地域全体の中でのインドネシア、とくにジャワの国際経済的地位とその変化をよりグローバルな視野から考え直すために、昨年度にオランダ語の基本資料に遡って収集した植民地期の貿易統計を解析する作業を行った。

北原　淳：以下の研究に取り組み、一定の成果をえた。(1)NGO農村開発運動グループの共同体言説を批判的に考察した拙著『共同体の思想』に関する書評類に応えて、共同体に関する同様の批判的分析が最近の外国人の研究の中にもみられることを紹介し、共同体概念の言説的次元での批判の意義を確認した。(2) 共同体概念の実証的批判作業として、沖縄本島の共有林管理慣行の歴史的変化を跡付け、それが18世紀における国家的政策の産物であることを明らかにした。(3) タイ華僑に関する言説が肯定的方向に変化してきた、

というガシアン・テージャピラの問題提起を受けて、それが複合社会における民主化の過程、つまり、他民族出自の資本家、中間層の政治的、社会的勢力としての成長の過程に応じた「公定ナショナリズム」の変質を象徴するものであると解釈した。また、このような動きに呼応するかのように、農村部でも、地方都市華僑とタイ農民上層部との新たな社会的融合が生じつつあるとの提起をした。

桜井由躬雄：　本年度は、2000年にわたって一つの歴史圏を形成してきた紅河デルタの中心性と辺境性のもつ意味と、分布を分析した。紅河デルタの辺境域、段丘複合地域及び沿海地域における合作社活動の調査分布において、共同体性が著しく欠落していることを発見した。つまり紅河デルタ中央自然堤防地域におけるきわめて合作社活動の活発な地域を第1的な核ゾーンとし、その周囲の氾濫原地域を第2ゾーンとする3層の構造をもつ中心周辺関係を歴史圏の中にみいだすことができた。今後は、この3層構造がどのような相互補完性をもって全体として一つの歴史圏を形成するかを考える。

山下晋司：　本年度の課題は、過去4年間にわたる研究をまとめることにあった。まとめに当たって、過去の研究をふまえて、「地域性」（ローカリティ）はグローバルな視野のなかで歴史的に立ち上がっていく、場合によっては創造されていくという視点をとった。その意味では地域性はある歴史的状況のなかでのインターロカリティのなかでこそ形成されるのである。そうした構図の中で、「地域性の形成論理」とエスニシティがどのようにかかわっていくのかを示すことが私の分担課題であったが、東南アジアにおける「民族＝文化複合性」（ethnic-cultural complexity）、とりわけ民族＝文化間関係を検討することによって、この課題を明らかにしようとした。

田中耕司：　一昨年度および昨年度の開拓社会における資源管理・資源利用に関わる論点の整理を踏まえて、東南アジア、とりわけその島嶼部をフロンティア社会として性格づけている資源－人口関係について、スラウェシおよびカリマンタンの開拓社会の変容やカリマンタンの稀少資源採集者の活動などから考察した。そして、熱帯降雨林地帯という世界で稀な資源賦与性が東南アジアのフロンティア性をこれからも永続させるであろうことを、土地利用の変貌過程の検証あるいは自然資源の「構想的利用」「投機的利用」という概念的分析によって示唆することができた。

5．今後の課題

以上に述べたような平成8年度の研究経過およびそれまでの3年間の研究経過をもとに、

各メンバーが抱いている成果とりまとめの方向を示して今年度の活動記録のまとめとしたい。

坪内良博：　地域を異質な要素によって区分するのか、あるいは地域を共通の要素によってくくるのか、という基本的に異なった地域理解への道があることを確認したうえで、東南アジアの小人口世界という基本的性格を介在させながら、これまでの東南アジア論のキーワードを検証した作業をとりまとめたい。上述の地域の形成要因のカテゴライゼーションを具体例により検討し、人口と資源の関係性を介在させることによって「フロンティア」「周辺」「複合性」などの地域性の形成過程を論じてみたい。

石井　溥：　南アジアを典型的な複合社会と見る観点に立ち、南アジア社会および南アジア社会論と東南アジア社会（論）の比較考察を行いたい。東南アジアの複合社会や（たとえばバリのような）ある種の「カースト」社会に関する論議は、インドのカースト社会（論）を視野に入れてなされている面があるが、その論議には当然のことながら、その時代時代の理論のありかたが反映している。南アジアの文化・社会に関わる解釈は、近年、様々な面で変わりつつあり、今日の比較研究は、そのような新しいパラダイムを視野に入れつつ進めることが不可欠である。このような問題意識にのっとり、主に複合性の観点から南アジアと東南アジアの比較考察を行う予定である。

加納啓良：　およそ以下の内容の最終成果報告論文の執筆を予定している。

「ジャワ型稠密社会の形成 ―移動・拡散から固着・凝集へ―」

1. 「ジャワ」とは何か
2. 稠密社会としてのジャワ島
3. ジャワ島はいつから稠密社会になったか
4. 植民地化以前のジャワ島
5. 村落史から見たジャワ島社会
6. ジャワ的空間の拡大

この論文とは別個に、上記バンギル県の地税賦課「詳細査定簿」のデータを分析したモノグラフ的論文の執筆も構想中である。また将来の展望としては、これまでに執筆した各種論文に手を加えたり新たに執筆する論考を編集し、『ジャワ村落史論』（仮題）という単行書を刊行することを計画している。さらに、貿易統計から見たインドネシア社会・経済の歴史的位置づけについては、別のプロジェクトに課題を引き継いで検討を続け、将来のとりまとめに備える予定である。

北原　淳：　「東南アジア資本主義化の文化論的構成」の整理をめざす。発足時からの課題である都鄙関係を視野に入れつつ、共同体論を中心とする農村社会論、華僑論を中心とするエスニシティー論、市民社会論をフォローし、両者を接合、総合したうえで、ポスト・ナショナリズム段階の資本主義化時代における文化論の構造的特徴を明らかにすることをめざす。

都市＝農村関係の客観的な変化をふまえた都市、農村に関する知識人・中間層の言説の変化は、東南アジアのグローバルな資本主義化にともなう新しいナショナリズム状況を意味するのか、それともナショナリズム状況終焉を意味するのか。この点についてはなお若干の作業を補足しながら、最終的成果報告を作成したい。

桜井由躬雄：(1）デルタ西北部のヴィンフー省と南方のナムハー省の村落文化遺産の成立時期を考え、紅河デルタにおける共通の文化ファションの成立に注目する。ここから共通の文化をもつ紅河デルタの村落社会の形成、つまり紅河デルタ歴史圏の形成を18世紀とする。(2) しかしながらそれぞれの村落形成にかかわる環境的条件、歴史的条件により、村落の物質的基盤が相違し、それが村落構造の粗密にかかわるドーナツ状のゾーンを形成する。(3) 社会主義化の合作社はこれら村落構造の社会主義的な表現であり、したがって社会主義合作社の形態にも、ファションとしての社会主義的、あるいは国家的統一性とゾーンとしての合作社形態の偏差が存在し、それが1988年以降の合作社の解体、村落化をむかえる時点において、鋭く顕在化しているとする。この分析は以後展開される新農民組織建設運動の中に大きな意味を持つであろう。

山下晋司：　本研究の最終的な研究成果報告としては「地域性の形成論理」班として一冊の論文集が計画されている。そのなかで論文を分担執筆したいと思っている。この論文は、上記の視点から東南アジアの地域性の形成に関し新しい光を投げかけるものである。とくに地域性というものが、「そこにある」ものではなく、歴史的状況のなかで形成されていく動態的なものであることを強調したい。その構成・内容は目下検討中であるが、1997年8月末をめどに完成させ、来年度中の刊行を計画している.

田中耕司：　今年度に行った資源論の視点を加味したフロンティア社会論が東南アジア固有の社会特性を理解するツールとなることを論議してみたい。成果のとりまとめのなかで具体的には開拓村落から農業村落への移行過程を扱うことになるが、自然資源の「構想的利用」と「投機的利用」という概念を援用しながら東南アジア島嶼部の土地利用変貌あるいはエコロジカル・プロセスについて考察することになろう。

6．研究業績（平成８年度発表分）

坪内良博

「『総合的地域研究』にむかって」『学術月報』50(1), 1997.

「小人口世界」『総合的地域研究』14: 8-9, 1996.

石井　溥

"Sana-guthis （Funeral Organization） in a Newar Village: Characterisitics and Change" in S. Lienhard (ed.) *Change and Continuity: Studies in the Nepalese Culture of the Kathmandu Valley.* Torio: CESMEO, pp.39-55, 1996.

Nepal: A Himalayan Kingdom in Transition. (coauther: Pradyumna P. Karan)Tokyo: United Nations University Press, xiv + 334 p., 1996.

「カトマンズ盆地のサフ：ネワールの生活と文化」薬師義美、雁部貞夫（編）『ヒマラヤ名峰事典』平凡社, pp.221-225, 1996.

加納啓良

Di Bawah Asap Pabric Gula: Masyarakat Desa di Pesisir Jawa Sepanjang Abad ke-20 (Coedited with Frans Husken & Djoko Surjo). Yogyakarta: Gadjah Mada University Press, x + 313p., 1995.

「ジャワ農村の屋敷地と農家経済」長谷川善計・江守五夫・肥前榮一（編）『家・屋敷地と霊・呪術』早稲田大学出版会, pp.276-298, 1996.

「インドネシアの官僚制――公務員制度を中心に」岩崎育夫・荻原宜之（編）『ASEAN 諸国の官僚制』アジア経済研究所, pp.5-46, 1996.

「Changing Economy in Indonesia と植民地期インドネシアの貿易統計」一橋大学経済研究所『ニュースレター：アジア長期経済統計データベースプロジェクト』No.4: 12-13, 1996.

北原　淳

『共同体の思想：村落開発理論の比較社会学』世界思想社, 220+v p., 1996.

The Thai Rural Community Reconsidered, Bankok: Chulalongkorn University. The Political Economy Center, 190p., 1996.

State of Thai Studies in Japan, The Thai Seminor of Japan (co-Edited with Akagi), 195p., 1996.

「沖縄村落共同体理論の再検討のために：本島の山林管理慣行を中心に」『社会学雑誌』14: 158-168, 1996.

「外国研究：東・東南アジアの農業・農村変動」『年報　村落社会研究』32: 309-326, 1996.

「屋敷地共住集団：その持続的可能性について」『総合的地域研究』14: 32-34, 1996.

「タイ国における工業化と地域社会の変動」『国際協力論集』4(2): 77-97, 1996.

"Crisis of Asian Peasant Farming under the Pressured Liberalization." 神戸大学農学部シンポジウム記録集（1996年11月9日）.

『沖縄の都市と農村：復帰・開発と構造的特質』（書評）山本英治・高橋明善・蓮見音彦（編）『地方自治叢書』［日本地方自治学会］9: 185-187, 1996.

「書評に応えて」：北原淳著『共同体の思想』［評者：池田寛二］『ソシオロジ』41(2): 149-122, 1996.

桜井由躬雄

「95年採集ソムB集落に関するベーシックデータ」『百穀社通信』5: 1-114, 1996.

「紅河デルタ水利調査報告」（河野泰之・柳沢雅之と共著）『百穀社通信』5: 158-167, 1996.

「陸域と海域」『歴史学研究』691: 2-14, 1996.

「1996－2000年5ヶ年計画に関する農業問題への提言」『ヴィエトナム国市場経済化支援開発政策調査報告書』第5巻：35-40, 1996.

Proposal for Adressing Agricultural Problems in Five Year Plan(1996-2000), *The Economic Development policy in the Transition toward a Market-oriented Economy in the Socialis Republic of Vietnam*, vol.5: 37-44, 1996.

「合作社の経営危機――「弱い」合作社ということ――96年ヴィンフー省合作社調査報告から」『百穀社通信』6: 6-50, 1997.

「10号指示以前の生産隊――旧生産隊幹部からの情報」『百穀社通信』6: 72-85, 1997.

「バックコックの村内社会インフラ」『百穀社通信』6: 86-95, 1997.

『百穀社通信 第4号 1995年夏期調査報告特集』（編）東京大学大学院人文社会系研究科南東南アジア歴史社会研究室，132p., 1996.

『百穀社通信 第5号』（編）東京大学大学院人文社会系研究科南東南アジア歴史社会研究室，168p., 1996.

『百穀社通信 第6号』（編）東京大学大学院人文社会系研究科南東南アジア歴史社会研究室，148p., 1996.

山下晋司

「移動の民族誌――グローバライゼーションと文化の生成（4）越境する文化」『自動車とその世界』267: 59-65, 1996.

「越境する人々、越境する文化」『総合的地域研究』13:18-19, 京都大学東南アジア研究センター，1996.

「東南アジアにおけるフィールドワーク」須藤健一編『フィールドワークを歩く』 pp.191-198, 嵯峨野書院, 1996.

『観光人類学』(編)新曜社, 211+x p., 1996.

「『楽園』の創造—バリにおける観光と伝統の再構築」山下晋司(編)『観光人類学』新曜社, pp.104-112, 1996.

「『カンニバル・ツアーズ』—パプアニューギニア・セピック川流域の観光」山下晋司(編)『観光人類学』新曜社, pp.141-149, 1996.

『岩波講座文化人類学7・移動の民族誌』(共編)岩波書店, 1996.

「南へ!北へ!——移動の民族誌」『岩波講座文化人類学7・移動の民族誌』岩波書店, pp.1-28, 1996.

「<南>へ——バリ観光のなかの日本人」『岩波講座文化人類学7・移動の民族誌』岩波書店, pp.31-59, 1996.

「『書くこと』と人類学者 — クリフォード・ギアーツ」(書評)森泉弘次訳『文化の読み方/書き方』『現代詩手帖』40-2:177, 1997.

田中耕司

「熱帯農学研究から地域研究へ」『総合的地域研究』第13号: 10-11, 1996.

「生活者の『森』と観察者の『森林』」山田勇(編)『森と人の対話』人文書院, pp.222-248, 1996.

「明日の作物学 — 新しい地平を求めて — :発展途上国の農業事情と今後の作物学」『農業および園芸』71(9): 969-973, 1996.

「建部清庵著『備荒草木図』」(翻刻・注解・現代語訳・解題)『日本農書全集』第68巻, 農山漁村文化協会, pp.31-237, 1996.

「フィールド・ワークから生まれた稲作論」農耕文化研究振興会(編)『稲作空間の生態』(農耕の世界、その技術と文化Ⅲ)大明堂, pp.1-13, 1996.

「アグロノミストからみた『地域』把握の課題」『農林業問題研究』第124号: 141-145, 1996.

"Who owns the forest?: The boundary between forest and farmland at the frontier of land reclamation." 『東南アジア研究』34(4): 23-32, 1997.

"Village-level studies on rice-based cropping systems in the low-lying areas of Bangladesh II. Toposequence, hydrology, land classification and cropping patterns in the Barind Tract, Bogra District." (共著) *Jap. Jour. Crop Science*, 66(1):118-128, 1997.